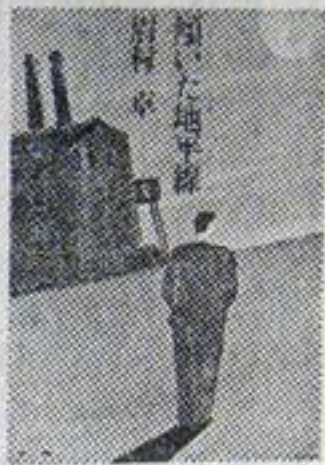




傾いた地平線
眉村 卓
角川書店
(9/30刊・¥960)

ある日、放送局にむかった主人公のSF作家が、ふと気が付くと、何年も前に自分が勤めていた会社にいる。しかも、彼はその異次元の自分と、そっくり意識が入れ替っていた。この世界では、彼は会社を辞めておらず、もちろん作家にもなっていない。そして、否応なく生活に適應しようとするが、ようやく慣れたと思うころ、また再び別の異次元に——ありえたかも知れない、蓋然性の自分へと移っていた……。

同著者の『ぬばたまの……』は、人間の意識が分離した異次元の社会を描く、ユニークな傑作だった。本書は、その姉妹篇にあたる。

あのとき、もし〱していたら——という、基本的アイデアの応用篇とでもいえるのか——『ぬばたまの……』の時は、その『もし』が、異次元の世界に転移する不気味さに連なっていた。一方、本書は、一定の周期を置いて、しだいにかつての自分と喰い違っていく様子を描いた、恐怖と諦観とが混在する作品だ。

特異性では、やや前作に劣るが、著者の実験に負うところの描写には、やはり現実感があり、効果を上げている。